

サントゥールとペルシャピアノシリーズ
Vol.1 『CHAHARGAH』 سنتور و پیانو

本日はご来場ありがとうございます。

このコンサートは「サントゥールとペルシャピアノ」というシリーズの第1回目にしようと思っております。1回目のテーマは、イラン古典音楽のダストガー（旋法）の1つ、チャハールガーです。

ダストガーはヨーロッパの教会旋法（ドリア旋法やリディア旋法など）と似ています。このチャハールガー旋法は特に微分音程が多く含まれ、一般的にイメージされる中東っぽさが強く感じられるのではないかと思います。

サントゥールの演奏がメインですが、今回はそのチャハールガー旋法をピアノでも演奏します。（微分音程は無いですが…チャハールガーの雰囲気は出ています）この作品は、イランにおけるオーケストラなど多声音楽の方面で多大な影響を与えた19世紀のフランス人作曲家によりアレンジされていて興味深いです。（元はイランの歌や旋律です）

あとは古典音楽以外で、ペルシャ音楽の影響を受けた現代音楽も演奏します。以前2016年に初演した川合清裕の「サントゥールとピアノのための小品」も今回改訂版で演奏します。ごゆっくりお楽しみ下さい。

第1部

チャハールガー旋法による旋律 / **Dastgāh-e Čahārgāh**

序曲 Piš darāmad (pre-introduction)、前奏曲 Darāmad (opening, introduction)、
エチュード Čahārmezrab (four plectra, four strokes)、バラード Tasnif (ballad)・・・etc.

サントゥール santour 内海 恵
トンバク tonbak 川合 清裕
(Farāmarz Pāyvar の楽譜に基づいています)

第2部

1. 「Persian Āvāzes and Tasnifs」より抜粋
arranged for the piano by Alfred Jean-Baptiste Lemaire
edited by Manuchehr Sahbai

2. 「Čahārgāh」
composed by J.Marufie

3. 「Dancing in the village」
composed by Fozie Majd 1~3 piano 内海 恵

4. 「サントゥールとピアノのための小品」
composed by Kiyohiro Kawai santour 内海 恵 piano 川合 清裕

※本日の演奏曲のプログラムノートは後日ホームページ上でもアップ予定です。

<http://utsumimusiclab.jp/>

2020年1月23日（木）
@江戸堀コダマビル レッスンホール

プログラムノート

- ①はじめに
- ②ペルシャ音楽の旋法体系(ダストガー)について
- ③楽曲解説

①はじめに

日本ではサントゥールという楽器はまだまだなじみが薄い。しかし実は日本からかけ離れた存在ではなく、邦楽の楽器として定着していてもおかしくはない楽器なのだ。

サントゥールは2本の撥(メズラブ)でその弦を打弦して演奏する打弦楽器である。台形の木箱に72本の金属弦が張られており、弦は4本で1つの音を出す仕組みになっている。

ペルシャ古典音楽にはかかせない楽器であり、イランはもちろん世界中に大勢の演奏者が存在する。その歴史は古く、西アジア・中央アジア発祥であるこの楽器は、西洋のハンマーダルシマーやハックブレット、ツインバロム、中国のヤンチンなどの打弦楽器の祖となるものである。日本にも一度江戸時代に上陸したが定着はしなかった。同じく西アジア発祥とされるウードが西洋ではリュートになり、東洋では琵琶になったというのは有名な話であるし、また三味線の祖はセタールではないかと考えられている。サントゥールが日本に根付かなかったのはおそらく日本の多湿という風土にサントゥールが合わなかったためではないかと考える。

打弦楽器の祖サントゥールが長いときを経て日本に広がり出すのは、20世紀後半にイラン革命から逃れた古美術商の一家が来日してからである。この一家の中にサントゥールを演奏する女性プーリー・アナビアンがおり、彼女が音楽大学で教え始めることで、多くの弟子が誕生した。

サントゥールという楽器にのめりこみペルシャ音楽に深く関わるようになったのは偶然で、私たちは音大で民族音楽演習という授業を選択するまでその存在も知らなかった。また、サントゥールの師匠が音大で教鞭を取っていたのも数多くの偶然が重なった結果であり、この偶然性を私たちは大切にしたいと思う。

シリーズ第1回目となる今回のコンサートでは、テーマにしているチャハールガー旋法によるペルシャ古典音楽をサントゥールとピアノで演奏し、またペルシャ音楽の影響を受けた現代音楽作品も演奏する。このコンサートシリーズは私たちのライフワークの一つであり、年に数回ずつ、何年にもわたって継続していきたいと考えている。

②ペルシャ音楽の旋法体系(ダストガー)について

現在ペルシャ古典音楽の核となっている旋法体系(ダストガー)はカジャール朝時代(1779-1925)に体系化されたものである。ダストガーは12種類あり、その中に主要なダストガーが7つ、副次的なダストガーが5つある。

主要なダストガーは、シュール shur、セガー segah、ホマユーン homayun、チャハールガー chahargah、マールフル mahur、ナヴァー nava、ラストパンジュガー rast-panjgah の7つであり、副次的なダストガーは、アブ・アター abu'ata、バヤーテ・トルク bayat-e tork、アフシャーリー afshari、ダシュティ dashti、バヤーテ・エスファハーン bayat-e esfahan の5つである。

ペルシャ古典音楽の旋法は単なる音階として存在するのではなく、常にグーシェ gushe とよばれる小旋律型あるいは小曲をいくつか内包した形で存在している。それゆえ旋法をスケールとして記譜することはあまり重要ではないが、以下にニューグローブ音楽辞典に記載されている音階を各旋法ごとに示す。

↓...1/4音下げる

シュール アブ・アター

ダシュティ パヤーテ・トルク

アフシャーリー セガー

チャハールガー ホマユーン

パヤーテ・エスファハーン ナヴァー

マーフル ラーストパンジュガー

ダストガーに基づく演奏では、はじめに特に重要なグーシェであるダラマド **daramad** (前奏の意) が演奏され、それによりこれからの演奏の方向性が示される。演奏される音域は徐々に高音域に移動していき、やがて下降しもとの音域にもどる。こうした構造を演奏者も聴衆もおそらく無意識的に理解している。例えば演奏者がシュール旋法のダラマドを演奏しはじめたとき、このダラマドが発展していき、音域が上昇し、やがて下降してもとの音域に戻るといことを演奏者はもちろん聴衆も頭のどこかで意識しているのである。それぞれのグーシェはこのつながり、連続性の中で存在しており、バラバラに切り離されてしまうとその存在は宙に浮き意味のあるものでは無くなってしまふだろう。

こうした構造はひとつの物語にも似ている。物語が「昔々、あるところに～」と始まったときには「めでたしめでたし」と終わることを聞き手が予期しているように。ペルシャ古典音楽における音楽構造とは、ある共同体の中で伝承され、共有された物語のようなものではないか。演奏者はダラマドの演奏によって今から長い物語が始まることを聴衆に予感させ、そして連続して演奏されるグーシェを聴いていくうちに、聴衆は物語の方向性を理解する。そして長い物語に没入していくのだ。

西洋音楽におけるソナタ形式もこういう物語性をもっていると見ることもできるが、ペルシャ音楽が西洋音楽と決定的に異なる点は、即興演奏に重点がおかれているということだ。もちろん、あらかじめ作曲された作品も長いダストガーの中で演奏されるが、ダストガー内での即興演奏こそがペルシャ音楽の醍醐味である。熟練した演奏者になるとその即興で聴衆を異界に導き、演奏しながら自らも瞑想状態に入ることができる。このように聴衆も一体となった小宇宙を形成することが私たちの理想である。

③楽曲解説

第1部

チャハールガー旋法による旋律 / **Dastgāh-e Čahārgāh**

序曲 **Piš darāmad** (pre-introduction)、前奏曲 **Darāmad** (opening, introduction)、
エチュード **Čahārmezrab** (four plectra, four strokes)、バラード **Tasnif** (ballad)・・・etc.

サントゥール **santour** 内海 恵
トンバク **tonbak** 川合 清裕
(**Farāmarz Pāyvar** の楽譜に基づいています)

今回は 12 種類あるダストガーの中からチャハールガー旋法を演奏する。チャハールガー旋法は微分音を豊かに含む旋法で、重要な音はソ、ラ(コロン)、シ、ドの4つである。ドが中心音でラ(コロン)から始まることが多い。レ(コロン)や、音域が上がっていくにつれてミ(コロン)、ファ#も登場する。(コロン:1/4 音下げる意)

ピシュダラマドというプレイントロダクションからスタートし、前奏としてのダラマド、そこから様々なグーシェを合間にチャハールメズラーブというテンポの速い練習曲のような器楽曲や、タスニーフと呼ばれるバラードのような曲を入れながら演奏し、最後はレング **reng** とよばれる舞曲で締める。

ファラマズ・パイバール **Farāmarz Pāyvar** (1933-2009) は、イラン人作曲家・サントゥール奏者であり、(私たちの師)プーリー・アナビアンプーリー・アナビアンの師であった人である。優れた演奏者、指導者として数多くの弟子を育て、教本も多く出版されている。サントゥールの撥(メズラブ)にフェルトをはるようになったのは彼のアイデアだとされている。彼の楽譜をもとに即興をまじえながら演奏する。

第2部

1. 「Persian Āvāzes and Tasnifs」より抜粋

arranged for the piano by Alfred Jean-Baptiste Lemaire
edited by Manuchehr Sahbai

A.ルメール **Alfred Jean-Baptiste Lemaire** (1842-1907) はイランに西洋音楽を導入することになった重要人物である。パリのコンセルヴァトワールを卒業した後、軍楽隊の隊長を務めており、1868年にテヘランに派遣された。当時の王に気に入られ、イランの最初の国歌はルメールによって作曲された。

「Persian Āvāzes and Tasnifs」は 1900年にピアノアレンジが完成した。ルメールは当時の王の命令で古典曲を五線譜に採譜し、ピアノで演奏できるようにアレンジしていた。ルメールは多くの作品を残したが、今ではその多くは失われてしまった。この楽譜は現在も活躍しているイラン人指揮者の **M.サーバイ Manuchehr Sahbai** により偶然発見され、2003年に出版された。

2. 「Čahārgāh」

composed by J.Marufie

これはイラン人作曲家 **J.マールーフィ J.Marufie** (1912-1993) によるピアノソロのための作品である。タイトルの通りチャハールガー旋法で書かれている。微分音はないが、上手くチャハールガーの雰囲気を出している。ルメールの作品では右手は単旋律を演奏し、左手は単純な和音で右手を支える形であったが、この曲では左手もよく使われかなり技巧的で演奏効果の高い作品になっており、イランの音楽学校のピアノの生徒の卒業試験曲になることもあったそうである。五線譜で書かれてはいるが、途中で「アドリブで」と書かれている部分や拍子感のない部分もあり、西洋音楽とはちがうペルシャ音楽ならではの特徴を感じることができる。

3. 「Dancing in the village」
composed by Fozie Majd

1~3 piano 内海 恵

これは現代のイラン人作曲家によるピアノソロのための作品で、2000年に出版された「Three Pieces for Piano」という楽譜の中の一曲である。F.マイド Fozie Majd は西洋音楽とペルシャ音楽のどちらにも精通しており、この曲は無調の中で調性感が所々に現れる西洋現代音楽の手法でかかれてはいるが、ペルシャ音楽らしさも感じさせる稀有な作品である。彼女の作品は引き続き次回のコンサートでも取り上げる予定である。

4. 「サントゥールとピアノのための小品」(改訂版)

composed by Kiyohiro Kawai

santour 内海 恵 piano 川合 清裕

サントゥールは打弦楽器であり、打楽器と弦楽器両方の特性を併せ持っている点を活かしたアプローチが可能である。この作品では打楽器的な表現であるデッドストロークと、弦楽器的な表現であるハーモニクスが使用されている。ハーモニクスは音色的変化もさることながら、実質 27 音しか設定することのできないこの楽器にとっては、ピッチの可能性も押し拡げてくれることとなった。また、自らで調弦できるという特性も現代の音楽に向いていることから、この作品ではいくつかの微分音と特殊なチューニングによる二種類の効果音的音響が設定されている。非常に分かりやすくポップな作品で、21 世紀のサントゥールの新たなレパートリーとなるようなものを目指して作曲された。今回はこの、2016 年に初演した川合清裕の「サントゥールとピアノのための小品」の改訂版を演奏する。この作品は、最終的に組曲として発表する予定である。

サントゥールとペルシャピアノシリーズ

Vol.1 『CHAHARGAH』 سنتور و پیانو

2020 年 1 月 23 日 (木)

@江戸堀コダマビル レッスンホール

☆余談ですが、私たちは Bulbul (ブルブル) というグループ名を持っています。Bulbul はペルシャ語、ナイチンゲール (日本ではサヨナキドリと呼ばれます) という鳥を意味します。